
超図形 短編 3

やらない夫の弟子N号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超図形 短編3

【Nコード】

N62730

【作者名】

やらない夫の弟子N号

【あらすじ】

諸般の事情により改稿することにしたのでまだ読まないで頂けるとたすかります。すいません。

なんでもかんでも超を付ければいいってもんじゃない。まったく、最近の若いもんは、と思いつながら、どんなにちやもんをつけてやるうかという期待に震えながらその本を手にとった。

『超図形』

結論からいうとそれは高度な幾何学の本であり、なぜそんなものをただの一般人である私が手に取ってしまったかという私が古本屋の50円本コーナーをうろついていたからだ。

私には見えない世界を見る人達の世界がそこには広がっていた。書かれている内容は序文とあとがきの挨拶くらいしか理解できなかったが、描かれている図形やら表やらの方はなかなかおもしろかった。まあ、全く理解出来ないが故の面白さではあるが。

昔、学校で受けた幾何の授業は全く理解できず頭痛ばかりしたもののだが、古本屋の片隅にうずもれている古書であれば痛くもかゆくもない。年をとると無駄に度胸が付くのか、それとも偉大なる知性に畏敬を抱くことをも忘れるのだろうか。

しかし、子供には敵わない。

今、私は正座をして古本屋の奥の座敷に坐っている。机をはさんだ向かいにはこの書店の主の娘が鎮座している。その手には「超図形入門」と書かれている本が。

メガネをかけた少女の年の頃は15か、もつと小さい位だ。なぜ私がおんななことになっているのかといえば、例の「超図形」という本を棚に戻すときに吐いた一つのため息が原因だ。「おじいさん、その本よめなかったなら、私が教えてあげる」

拙い声でそう言われては、断ることはできなかった。……私の息子が結婚したのが十数年前、息子夫婦は子供をもうけなかったが、もし生まれていればあの少女くらいの年齢だったはずだ。

少女による授業は難航を極めた。そもそも、少女からして本の内容

を理解出来ないのに私に教えようとするからだ。はじめのうちこそあれやこれやと考えていたようだが、終いには「おじいさんこの本よんどいて」といつて襖を開けて出て行ってしまった。

私も一応手を付けてみたが、やはり分からずじまいだった。

それでも少女の厚意を無駄にはしないぞという気概だけで字を追っている、軽い足音がやってきて、襖が再び開いた。少女はお茶と菓子を持って来てくれたのだった。どうもありがとう、と言って受け取るころまではすべてが順調だった。しかし少女とお茶会は難航を極めた。それは少女が非常に引込み事案だということ、および私も話すのがうまくないという二点に起因する事象であった。とはいえ気まずさなど老人にとっては有ってなきがごとし。私は少女の緊張が時間と共に低減するのを待って、ついに会話の糸口をつかんだ。

「どうして、教えてくれたんだい？」

「えっと、すごく残念そうだったから、でも、全然分かんなくって、ごめんなさい」

とぎれとぎれであるものの、発言しようとする傾向は途切れることなく観察されたので私はひとまず胸をなでおろした。

「いやいや、その気持ちだけで有りがたいよ。お茶も、とってもおいしい」

「あ、おそまつさまです」

発言のはじめに間投詞を挿入する癖があるということとはなんとなく見て取れた。少女の顔は美しく、どうしてこんな古書林に埋もれているのかわからない。気が弱そうな表情が浮かぶかわいらしい顔は、なんというか、孫としてふさわしいものであった。

そもそも孫とはなんであるか。愛らしいものである（定義）。よって定義から演繹するとこの少女は私の孫である。それは絶対普遍の真実であり、どんな老人にも当てはまる気がする。だからこの少女をかわいがるのは私の義務であり権利であるのだ。

と、いうわけで。私はつい少女の頭へ延びそうな右手を理性でもっ

て抑え、紳士的に会話をしてまず距離を縮める作戦を立案した。脳内の賢人会議の出席者たちは喧々諤々の議論を展開し、あらゆる意見に対して否定と暴論と異論と改善案がぶつけられた。言葉の応酬は未だかつてないほどの数を重ねられ、積み重なり、議論の山の下に醸造された英知はその輝きをいや増し、ついには一つの結論に至った。

明日も来よう。

その時はミカンでも持ってこよう。

私はお茶を一口飲んだ。実はまったく味も香りもしないのだが、少女の気遣いを思うと非常にうまく感じられるのである。

それから、二人で何の変哲もない会話を楽しんだ。一度も彼女を”おじょうちゃん”と呼ばなかったのは孫として扱ったための布石であることを知る者はいない。

（後書き）

筆を滑らせるのが楽しくて癖になってこまります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6273o/>

超図形 短編3

2010年11月2日14時35分発行